

(2019年度) ちゅうでん教育振興助成

高等専門学校部の部 (2020年度助成)

報告書資料 No - 11

学校名	宇部工業高等専門学校
活動・研究のテーマ	障がいを持つ教員がロールモデルとなる -ダイバーシティ社会の礎に-

**背景と意義**

多様性のある社会の実現に向けて、近年、障害者雇用(公的機関での法定雇用率 2.4%)が加速している。文部科学省も 2019 年度に「障害者活躍推進プラン 6」を掲げ、今後、障害を持つ者を教員として積極的に採用していく方針を示している。このように社会の多様性を求める動きが活発化している。

しかし、当事者の現実は厳しいと言わざるを得ない。申請者(重度視覚障害)は、NPO 法人タートルや視覚障害教師の会といった当事者団体で、様々な業種で働く障害者の声を聞いてきた。多くの場合、障害者は職場で悩みや苦しみを抱え、誰にも相談できずに孤立している。法定雇用率を満たすためだけに雇用され、その後の支援が不十分というケースが多々ある。これでは障害者の就労定着、ひいては社会進出には結びつかず、真の多様性社会の形成には至らない。

申請者は社会の入り口である教育現場で、教育者として何ができるだろうかと自問自答してきた。実際、どの教育現場にも障害を抱えた学生がいる。例えば、発達障害は教室に数人はいるが、支援が行き届いてないことが多い。そして、その学生が卒業までにたどり着けたとしても、就職先に適応できず、最悪離職することもある。これを回避するには、当事者が学生時代から自分の特性を理解し、自身に必要な支援を言葉として具体的に相手に伝える訓練が不可欠である。

ここで申請者は、障害を持つ教員こそがそのような学生の手助けができると考えている。つまり、教員自身が必要な支援を明示し、周囲の助けを借りながら教壇に立ち続ける姿を見せることでロールモデルとなりうる。問題を一人で抱え込まず、周囲の理解と支援により、安心して生きていく。学生がこのメッセージを受け止め、より支援を得やすい環境作りができるのではと考えた。障害者教員は支援が必要な学生のよき理解者として、また学校と学生の大切なパイプ役となれるのではと期待している。

**期待される効果**

本校にも障害を抱える学生がおり、今後も継続的に入学してくることが予想される。障害の種類により必要な支援は異なるが、それを具体化する作業がある。申請者は自らの体験を発信し続け、宇部高専の優れた支援体制と自己工夫の大切さを社会に発信してきた。この経験を活かし、ハンディを持つ学生が、今必要なこと、将来のキャリア形成に欠かせないスキルを、学生と共に模索したい。その結果、本校の学生支援体制が充実したものになることを期待している。

2016 年に施行された障害者差別解消法により、障害を持つものは所属組織に対し「合理的配慮」を求めることができるようになった。しかし、配慮だけでは解決できることは限られており、自己工夫も強く求められる。

工夫の中身は障害により異なるが、申請者の場合、教育の ICT 化、当事者との定期的な情報交換の場を持つことで、常に創意工夫の可能性を探ってきた。学生にも同様に、常に自らできる工夫がないかとも考えていきたい。困難を一人で抱え込まないようにするために、まずは地元の当事者団体につなげ、地域社会と学校、そして家庭との連携により、学生が卒業後も相談ができる場所を得られることが期待できる。

## 活動

昨年度から続くコロナ禍の影響のため、対面での発信活動は制限を受けた。しかしながら、リモートワークやオンライン会議がすっかりと社会に定着したため、Web 上での発信機会が増えた。

一例として、昨年度に発表した出版物をきっかけに、これまで関わりの薄かった異文化間教育学会に講師として参加する機会を得た<sup>1</sup>。この会議では、聴覚障害や留学生といった異なる背景を持つ学生が抱く困難と視覚障害者が抱くそれとの共通点、相違について意見交換を行った。その過程で、今後強化すべきは自然な手のさしのべ(ナチュラルサポート)であろうという確信を強くした。

自身の持つ困難や特性を具体化する試みとして、専門家による取材を受けた<sup>3</sup>。記事は本年度 4 月にオンライン公開された<sup>2</sup>。理解されにくい障害の一つである視野障害について、日常生活の中にある困難について説明した。「目が悪い=視力が極端に低い」という世間の先入観を変えるために、視野障害者である自身の体験談を共有した。とくに視力はあるが視野が極端に狭い特徴をもつ求心性視野障害が直面する不便さについて解説した。例として、「15メートル先の人の顔は判別つくが、目の前の人の顔はわからない」がある。これは狭い視野のため、遠くにいる人の顔は視野内に収まるが、目の前の人の顔は視野からはみ出てしまうために起こる。目の医学的な症状を考えれば当然予想が着く現象ではあるが、それを見聞きする機会のないものにとっては新鮮な情報で、求心性視野障害の困難を伝えることができたと考える。

困難を抱える当事者にとって最も参考となるのは先人の経験であり、歩みである。本年度の 1 月には自身が得てきた配慮を受ける側の心構について講演する機会があった<sup>2</sup>。これまで当事者として困っているという発信は多かったが、この配慮に助けられたというエピソードは少なかった。講演では後者のエピソードの共有に重点を置いた。支援者も当事者が何を求めているのか暗中模索の状態である。こういった状況からも、当事者が必要な支援を具体化する作業が必要なことを確認した。

## 成果

1. 島袋 勝弥、異文化間教育学会 第 29 回異文化間教育学会 2021 年 5 月 9 日
2. 島袋 勝弥、山陽小野田市立中央図書館 2022 年 1 月 29 日
3. 島袋 勝弥、伊藤亜紗 Web サイト 2021 年 4 月 22 日  
([http://asaito.com/research/2021/04/post\\_78.php](http://asaito.com/research/2021/04/post_78.php))